

平成 21 年 6 月 16 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006 年度～2008 年度
 課題番号：18520223
 研究課題名（和文） ジェイムズ・ジョイスとオリエンタリズム

研究課題名（英文） James Joyce and Orientalism

研究代表者

伊東 栄志郎 (EISHIRO ITO)
 岩手県立大学・共通教育センター・准教授
 研究者番号：70249241

研究成果の概要：本研究「ジェイムズ・ジョイスとオリエンタリズム」は、従来ひたすらヨーロッパ的作家として研究されてきた枠組みから 20 世紀を代表するアイルランド人作家ジョイスを解放し、エドワード・サイードのオリエンタリズム理論に基づき、ユダヤ人を含めたオリエント、さらに東アジアとの関連において研究したものである。交付を受けた 3 年間に、国際学会発表 5 件、学術雑誌掲載論文 4 件(査読付)、著書 1 件(共著)という成果を発表した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	600,000	0	600,000
2007 年度	600,000	180,000	780,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	360,000	2,160,000

研究分野：

科研費の分科・細目：英米文学

キーワード：英米文学、J・ジョイス、オリエンタリズム、オリエント、(反)ユダヤ主義

1. 研究開始当初の背景

「オリエント」には、ギリシャ、エジプト、ユダヤ人居住域、イスラム諸国から、中国、日本にいたる広大なアジアまでの地域が当てはまる。そして、「オリエント」（東洋）とオクシデント（西洋）を結ぶのが、ユダヤ人であり、ユダヤ性である。ユダヤという言葉は、カール・マルクスやフェリックス・メンデルスゾーン、アルバート・アインシュタインなどの輝かしいユダヤ人の名前と同時に、金銭と暗さを連想させる。ユダヤ人は、旧約聖書以来、神に選ばれた民、もしくは呪われた民として世界を放浪する人々、陰険な鷲鼻

の商人、フリーメイソンをはじめとした秘密結社を結ぶ反社会的勢力の中心であると古来より非ユダヤ人たちから考えられてきた。ヨーロッパにおける反ユダヤ主義は大変根強いもので、日本においてさえ、断片的に受け入れられているかのようである。自身もユダヤ人であるジャン・ポール・サルトルは、二千年来のユダヤ人迫害の原因が、決して被害者側には見当たらず、むしろ加害者側にあったという見解を示している（『ユダヤ人問題についての考察』1954）。聖書からヒトラーにいたる反ユダヤ主義は、ユダヤ人の背中にすべての社会悪の責任をなすりつけ、選民的全

体主義をうちたてる手段であったというのである。サルトルによれば、「もしユダヤ人が存在しなかったならば、反ユダヤ主義者たちは、それに代わるものを作り上げたであろうし、「他の国においては、それが黒人であったり、黄色人種であったりする」という。このサルトルの主張は、オリエンタリズムという語があまりに曖昧で、一般的すぎて、しかも19世紀から20世紀初頭にいたるヨーロッパ植民主義の横暴な出向者の姿勢を暗示しているというサイドの主張に相通するものがある。即ち、オリエンタリズムも反ユダヤ主義も、ヨーロッパ人の持つ反ヨーロッパ的なものへの畏怖と嫌悪感が作り上げたものだけということである。オリエンタリズムとユダヤ主義を元に、「ヨーロッパ作家」の代表的存在ジョイスを分析することは、アンチテーゼ的な意義がある。

2. 研究の目的

本研究「ジェイムズ・ジョイスとオリエンタリズム」の主たる目的は、ジョイス (James Joyce, 1882-1941) を、従来から行われていたヨーロッパ文学という枠組みから解放し、エドワード・サイドの『オリエンタリズム』 (Edward W. Said, *Orientalism* (1978)) の枠組みで再考することにある。ジョイスは、アイルランドで生まれ、大学卒業後ヨーロッパ大陸に滞在し続け、(反)キリスト者の視点で生涯故郷ダブリンのみを描写し続けた。申請した3年間においては以下のことを研究・解明していく：

- (1) 『ユリシーズ』 (*Ulysses* (1922)) を (反)ユダヤ主義の視点及び東方のユダヤ人の移民に関するポスト・コロニアルな視点からの研究。
- (2) アイルランドにおけるオリエンタリズムとジョイス作品への影響に関する研究。
- (3) 日本語・日本文化のジョイス作品、特に『フィンネガンズ・ウェイク』 (*Finnegans Wake* (1939)) への受容に関する研究。

本研究における「オリエン」(東洋)とは、オクシデント(西洋)に相対するものであり、オリエンタリズムとは、両者の間に設けられた存在論的・認識論的区別に基づく思考様式のことを指す。サイドは、オリエンタリズムとは、オリエンを支配し再構成し威圧するための西洋の様式であるという。オリエンタリズム的視点からジョイス文学を再考することは、オクシデント優位の既存ジョイス研究の脱構築であり、言説(ディスクール)の再検討につながる。

3. 研究の方法

- (1) 基本的に研究→調査→学会発表→調査→

中間報告という手順となる。年数回程度東京の関東ジェイムズ・ジョイス研究会及び京都の関西『ユリシーズ』読書会に参加し、発表当番をこなすかわら、情報交換などをおこなった。

(2) 原則として、欧州各地で資料収集を行いながら、年1件以上の国際学会発表をおこない、欧米及び東アジアの研究者と積極的に意見交換し、さらに学会終了後の現地研修・資料収集を踏まえて、学会発表論文を加筆修正する形で、年1件以上の論文を発表していった。

4. 研究成果

科研費交付金をいただいた3年間の研究内容、研究成果を時系列的にまとめると、以下のとおりになる。

(1) 2006年度前半には、主として東方ユダヤ人の研究を行った。具体的には、『ユリシーズ』の主人公レオポルド・ブルームの父親の出身地ハンガリーにおいて19世紀中葉のユダヤ人の歴史を調査した。その調査内容を踏まえて発表した論文は以下のようにまとめられる。

現代シオニズムの父であるテオドア・ヘルツルがブダペストで生まれた1860年には、ヨーロッパで反ユダヤ主義は激しくなかった。『ユリシーズ』は、反ユダヤ主義の文書として読むことが出来る。レオポルド・ブルームは言う：「それに私はある民族に属している、憎まれ、迫害されている民族に。今もだ。まさにこの瞬間も。まさにこの一瞬でも」(*U* 12. 1467-68)。どれほど真剣にブルームはこのように述べているのだろうか？本論は、『ユリシーズ』における反ユダヤ主義への言及を探求したものである。高名な伝記作家でユダヤ系アメリカ人リチャード・エルマンは、ジョイスがオットー・ヴァイニンガーの『性と性格』(1903)やモーリス・フィッシュバーグの『ユダヤ人 民族と環境についての研究』(1911)を読んだというごくわずかな証拠のみ提供した。しかしながら、「女性的なユダヤ人男性」や「自己憎悪するユダヤ人」というヴァイニンガーの学説やフィッシュバーグのユダヤの文化的多様性についての主張はジョイスを感化し、ブルームの複雑な性格を創作した。ブルームは「異民族間結婚」して、改宗し、自分のハンガリー系ユダヤ人の素性や宗教について正確な知識をほとんど持っていない。それでも、ユダヤの子孫として、彼がアイルランドのナショナリストや反ユダヤ主義者に嘲笑されることは避けられないのである。フィッシュバーグの主張では、ユダヤ人とは単一民族ではなく、その宗

教はいかなるナショナリズムの根拠であるべきではない。ヴァイニングが述べる民族と性の関係のいくらかは第15挿話「キルケー」に決定的に現れる。この論考では、『ユリシーズ』における上記の2つの書物の考え得る影響関係を再考している。

ジョイスは、ハンガリー系ユダヤ人という素性を持つ非ユダヤのユダヤ人レオポルド・ブルームを創造した。ブルームは同化したアイルランド系ユダヤ人だが、人々は彼を自分たちから区別し、嘲ろうとする。このことは恐らく、当時、ほとんどのユダヤの子孫たちが直面した状況なのであろう。ヨーロッパ諸国のナショナリストたちは、古代のユダヤの人々がイエス・キリストを殉教者として必要としたようにユダヤ人が必要だったのである。

(2) 2006年度後半は、韓国ソウル大学等で開催された東アジア・ジョイス学会に招聘され、日本とジョイスの関係についてポスト・コロニアリズムの視点からの発表準備とそのまとめのための作業に時間を費やした。韓国ソウルで、大勢の韓国人学者たちを前に、しかも中国、台湾から招聘された学者たちも聴講する学会での発表であったのだが、予想をはるかに超えた好意的な反響をいただいた。「共観東アジア史」実現の可能性が見えてきたようにさえ思われた。

論文タイトルの“United States of Asia”とはジョイスの手稿に記載されていた造語であり、これを中心にジョイスが決して日本の軍国主義を容認していないこと、むしろジョイスは、現在の中華人民共和国建国の父である孫文の大アジア主義に近い考えを作品中で示唆していることを論じた。ジョイスの時代、特に日清、日露戦争から2つの世界大戦へと進む軍国主義時代を中心に、日本がどのようにして「列強」の仲間入りを果たし、かつそれを維持しようとする過程で周辺諸国、ことに朝鮮半島、中国、台湾をどのように巻き込んでいったのか、それがジョイス作品にどのように直接的、間接的に言及されているのかを考察した。論じる過程で、日本が江戸時代末期のアメリカはじめ列強の圧倒的な軍事力に脅かされつつ、治外法権を認め、また関税自主権を放棄してしまったことに触れ、19世紀後半はその不平等条約を撤廃し、列強と対等の関係を築くことが悲願であったことを説明した。そのために、日本は富国強兵政策をとり、列強の仲間入りを果たす必要があったと説明したところ、韓国、中国の学者たちは当時の日本の状況に一定の理解を示してくれた。日露戦争後の一時期、孫文はじめ東アジアの要人たちは大日本帝国の成功を賞賛し、新渡戸稲造の『武士道』の書評がアイルランドでもジョン・エグリントン

や T. W. リスター(『ユリシーズ』第9挿話に登場)の主宰する文芸思想誌『ダーナ』に掲載されていることなども、論文中で言及している。

発表論文は、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』(1978)から派生したポスト・コロニアリズムの議論を日本とジョイス作品の関係に応用しながら、『ユリシーズ』と『フィネガンズ・ウェイク』の東アジア的視点による新たなジョイス解釈を試みたものである。ジョイスは、はじめて東アジアから欧米列強国に連なるべく勃興してきた大日本帝国に早くから興味を持っていた。例えば、1907年のイタリア語での講演「アイルランド、聖人と賢人の国」で、日中露戦争の戦果で得た東アジアの植民地のことを念頭におきながら、「日本の小人」(the Nipponese dwarf)と揶揄し、その専横ぶりはアフリカにおける欧米列強のそれと変わらないものとなるだろうとジョイスは予言している。『若い芸術家の肖像』で簡単にフランシスコ・ザビエルの中国、日本の布教活動に言及した後、『ユリシーズ』で日露戦争と関連報道に対するアイルランド国民の反応を断片的に描き、『フィネガンズ・ウェイク』においては日中戦争などを作品のモチーフにしたことを初めて解き明かした。そして、1930年代後半の緊迫した日中関係は、『フィネガンズ・ウェイク』最終第4巻の一場面に登場する日本人化した聖パトリックと中国人化したドルイド僧の対話に現れる(FW 611-613)。その論証材料として、ジョイスの手書きの創作ノートを徹底的に調査し、テキスト・ジェネティクスを議論した。この論文を加筆修正したものが、リチャード・ブラウン教授に認められ、彼が編集したジョイス研究書に掲載されることとなった。

(3) 2007年度には、アイルランドのユニヴァーシティ・コレッジ・ダブリンで開催された国際アイルランド文学学会(IASIL)において、ロシアを含む東欧諸国から移民してきたユダヤ人の生活がどのように『ユリシーズ』に描かれているかを考察した。この研究に関しては、特にアイリッシュ・ユダヤ人博物館の全面協力を得て、ジョイス作品に描かれているユダヤ人の多くが驚くべきことに実在の人物であることから、具体的に彼らがダブリンでどのように生活していたかを可能な限り調査し、論文にまとめた。完成した論文をご協力いただいたアイリッシュ・ユダヤ人博物館に寄贈したところ、光栄なことに展示物の一つに加えられた。

論文は、ジョイスの『ユリシーズ』に言及されるユダヤ系アイルランド人の中でとくに、フィクションの中にリアリティを出すために描かれる実在のユダヤ人について、調査

したものである。実際に調べてみると、1904年にはロシア、東欧で激しくなったユダヤ人迫害を逃れて、多くのユダヤ人が急速に流入しており、それに伴い、アイルランドの経済状況も影響を受けた。移民してきたユダヤ人たちは事務職など、ケルト系アイルランド人よりも賃金の高い職業に就き、ある程度経済的余裕が出来る、金貸しや反物商など自分で商売を始めるものも出てきた。それを面白く思わないアイルランド人たちは、ユダヤ人たちを蔑み、ヨーロッパ大陸ほど激しくなくとも「嘲笑」や西部のリマリック市などではカソリック司祭が扇動するボイコットなどにも発展したのが、まさに1904年当時である。ジョイスは実在のユダヤ人たちとおよび「リトル・エルサレム」と呼ばれたダブリン市南西部のユダヤ人街を巧妙に描写していることを、詳細な資料を提示しながらまとめた。

(4) 2008年6月には、フランスのトゥール市のフランソワ・ラブレー大学で開催された国際ジェイムズ・ジョイス・シンポジウムにおいて、「ジョイスとジャポニスム」というテーマで発表した。

ジャポニスムの流行は1867年第2回パリ万博、1873年ウイーン万博の以後のことであった。特にフランスにおいて、伝統的な手法を離れて新しい画法を模索していた印象派の画家たちに与えた影響が多岐にわたることはよく知られている。パリに20年住んだジョイスの友人たちの中には、日本文化に大きな興味を示したエズラ・パウンド、W. B. イェーツもおり、アーサー・パワーなどはアーサー・ウェイリーの英訳版『源氏物語』をジョイスに読ませようとした。日露戦争の1904年6月16日当時の経過は、芸者、風鈴、衝立などのジャポニスム同様、『ユリシーズ』の数カ所で言及される。ただし、繊細で表巧みな表現を用いているため、恐らくほとんどの読者が見逃してきたのである。『フィネガンズ・ウェイク』でも、日本はしばしば中国とともに言及され、伊東が現在確認している限り、日本語を含んだ言葉は推定80語ほど使用されている。とくにゴッホの「ボンズ(坊主)としての自画像」(1888)と「娘(La Mousme)」(1888)の2枚の絵画を中心に、ジョイスとゴッホが共通して読んだと思われるピエール・ロティの『お菊さん』(1887)の影響についてまとめた。

(5) 2008年9月には、韓国ソウル市の成均館大で開かれた東アジア・ジョイス学会に参加し、『ユリシーズ』のオリエンタリズムを分かりやすくかつ一般的体系化を目的として検証した。主人公レオポルド・ブルームはアイルランド人で生まれ育っているのだが、父親がユダヤ系ハンガリー人である。ハンガリーは5世紀初めにアジア系遊牧民フン族族長アッティラによって建国されたとよく誤解されている。聖書を見れば分かるように、ユダヤ人は古代メソポタミア(現イラク、シリア)周辺の遊牧・農耕の民であり、

バビロン捕囚やエジプトでの奴隷生活を経てイスラエルに落ち着き、ローマ軍により離散を余儀なくされるまでそこで暮らした民である。また、大多数のアイルランド人の祖先であるケルトは俗説では中央アジア出身であると言われている。このようにブルームは人種的には多分にアジア的であるが、どれもかすかで不確実なものである。『ユリシーズ』においてはこのブルームを中心として、オリエンタリズムの要素が抜かりなくちりばめられている。その中でも重要なものがF. D. トンプソンの『太陽を追いかけて』(1893)に基づくブルームの独白と国立博物館の仏像、マイラス・バザーの描写である。

本論では、エドワード・サイードのオリエンタリズム(1879)とジョセフ・レノンの『アイリッシュ・オリエンタリズム』(2004)を参照しながら、小説中のオリエンタリズムの描写を分析した。国立博物館の問題の仏像は実は8体の一つであり、1890年代から頻りに慈善目的で開催されたバザーなども、当時のダブリンが大英帝国の恩恵を受けていたことなどをポスト・コロニアリズムの議論を踏まえて論じたものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

1. Ito, Eishiro. "Orienting Orientalism in *Ulysses*." *James Joyce Journal* (The James Joyce Society of Korea). 査読有. Vol. 14, no. 2 (Winter 2008). 51-70.
2. Ito, Eishiro. "'And I belong to a race that is hated and persecuted': Anti-Semitism in *Ulysses*." 『総合政策』(岩手県立大学総合政策学会). 査読有. Vol. 9, no. 2 (2008年3月). 127-140.
3. Ito, Eishiro. "Diaspora Jews in Joyce's Dublin: Irish Jewish Lives Described in *Ulysses*." 『リベラル・アーツ』(岩手県立大学共通教育センター). 査読有. No. 2 (2008年1月). 29-43.
4. Ito, Eishiro. "'United States of Asia' (VI. B. 3. 073): A Postcolonial Reception of James Joyce and Japan." *James Joyce Journal* (The James Joyce Society of Korea). 査読有. Vol. 12, no. 2 (Winter 2008). 103-127.

[学会発表] (計 5 件)

1. Ito, Eishiro. "Orienting Orientalism in *Ulysses*." The 2008 Seoul Conference on James Joyce: "Glocalizing Joyce: East Asian & Other Perspectives." 2008

- 年9月27日. Sungkyunkwan University, Seoul, Korea.
2. Ito, Eishiro. “ ‘Bonzour’ ‘Mousoumeselles’ : Joyce and Japonisme.” XXI International James Joyce Symposium: “Re-Nascent Joyce.” 2008年6月20日. Universite Francois-Rabelais, Tours, France. (伊東は発表パネルの司会も担当)
 3. Ito, Eishiro. “Diaspora Jews in Joyce’s Dublin: Irish Jewish Lives Described in *Ulysses*.” IASIL 2007: “Varieties of Irishness.” 2007年7月17日. University College Dublin, Dublin, Ireland.
 4. Ito, Eishiro. “ ‘United States of Asia’ (VI.B.3.073): A Postcolonial Reception of James Joyce and Japan.” 2006 International James Joyce Conference on “The East-Asian Reception of James Joyce.” 2006年11月4日. Soongsil University, Seoul, Korea.
 5. Ito, Eishiro. “ ‘And I belong to a race that is hated and persecuted’ : Anti-Semitism in *Ulysses*.” XX International James Joyce Symposium: “Joycean Unions.” 2006年6月13日. Eotvos Lorand University, Budapest, Hungary.

[図書] (計 1 件)

Brown, Richard 編. *A Companion to James Joyce (Blackwell Companions to Literature and Culture)*. Oxford, Malden, MA and Carlton, Victoria: Blackwell Publishing). 2008年1月. (伊東担当部分: Chapter 12, 193-206)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊東 栄志郎

岩手県立大学・共通教育センター・准教授
研究者番号: 70249241

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

1. Kiljoong Kim
Seoul National University, Korea
人文学部教授
2. Eunkyung Chun
Soongsil University, Korea

文学部教授

3. Yu-chen Lin
National Sun Yat-sen University,
Taiwan 外国文学部教授
4. Ferenc Takacs
Eotvos Lorand University, Budapest,
Hungary 文学部英文学科教授
5. Raphael V. Siev
The Irish Jewish Museum 館長